【彼氏の愛が重すぎる】

第二章

著者：枝浬菰

幸せな誓いを立てた伊織と純平。
しかし彼らには思いも寄らぬ事件が舞い込む。

六年前
高校に上がった俺は家の者からこう告げられた。
「いいか、伊織、お前には兄が二人いるがお前の務めも果たしてもらわないといけない、もし言うことが聞けないのであれば家から出させないからな」
そう言われた。
矢神家は代々　ホテルの経営をしている。
ホテルグランシスやホテルマーメイド、ホテルウィルキンソンなど日本だけでなく海外ホテルも展開していてかなり大きな会社だ。
兄は経営者、俺はなにかホテル業界で活かせる特技を身につけろと言われた。
しかし俺だってやりたいことはある、このまま親の命令だけに従いたくない反

発から親にこう告げた

「学生の間は言うこと聞きますが大学を卒業したら俺はこの家を出て自由に生きます」そう伝えた。

母は「勝手にしなさい」と父は「矢神家からそう逃げられると思うなよ」と言ってきたのだ。

兄たちは特に否定するでもなく

「まぁ親の財産使えなくなるのは痛いよね」とか「長男に産まれなかったんだから自由に生きれば」とかは言ってきた。

だから安心しきっていたのかもしれない。

純平も小さい会社だがホテル業界の支配人で跡継ぎ問題があった。

しかし純平には姉がいた。

「姉に跡継ぎは任せようと思っている」

「それでご両親は納得しているんですか？」

「いや、俺もまだ高校生だからはっきり言われているわけじゃないけど、俺は伊織の傍にいたいよ」

純平との出会いは突然だった。

俺が潤のことが好きすぎてたまに校舎裏で泣いていることがあるそんな時に話をかけてきてくれたのが純平だった。

はじめはお人好しすぎるって思っていたけど先輩と話していくうちに少しだけ落ち着いたのかもしれない。

「ほら、これで涙拭いて」

「ありがとうございます」

二つ上の先輩だ。

「今日はどうしたんだい？」

「あ、大したことじゃないんです、俺が潤のこと好きすぎてたまに切なくなっちゃうだけなんです」

お腹のあたりをぎゅっと抑えキリキリと痛み出す切なさを見せないようにした。
男が好きなことも先輩は特になにも触れることなく優しく見守ってくれた。
「伊織、手貸してくれる？」
「手？」
両手を握って先輩の胸の前で優しくお祈りしてくれた。
「伊織が寂しくないように俺が包んであげるね」
「ふふっ先輩、本当に優しいですね」
「うん、伊織だけだよ」
にこっと笑顔でこちらを見て来たので急に恥ずかしくなった。
でも先輩はノンケだ、俺に気があったとしても体の繋がりを求めてはいけない。
先輩と初めてしたのは高校一年の冬だった。
受験勉強で忙しいのにわざわざクリスマスの日にホテルで一緒に一夜を過ごした。

男と寝たなんて親にバレたら今後自由などないと分かっていたから先輩のご両親が運営しているホテルに泊まることになった。

「ここ、俺の家族限定の客室だから安心してね」

この頃はまだ俺の家が大手のホテル経営者ということは先輩も知らなかった。

「うん、ありがとうございます」

観光地の旅館宿で先輩と二人で泊まる宿、もちろん俺もセックスは初めてだ。

ドキドキしてもう胸がはち切れそうになる。それは先輩も同じだった。

俺と違う点、先輩は元々男が好きではなく女の人が好きだということ、だから迷惑かけないように穴はちゃんと解してきた。

「雪景色きれいだね」

「はい、儚く溶けてしまうのはなんだかもったいない気がしますが」

「そうだね」

先輩と見つめては何度もドキドキしてでも俺は先輩にキスをした。

「伊織……」
二人とも馴れないキスで分かち合おうとしていた。
「伊織、もっと触ってもいい？」
「うん」
俺は着ていた浴衣を少し脱ぎ乳首を露わにすると先輩は
「きれいだ」と呟きそれにしゃぶりついた。
「んんっ……」
先輩に悪戯されていると思うと脳みそがビリビリと感じた。
そして俺の下半身は答えるかのように膨らみ始めた。
「伊織も初めて？」
「うん……初めて……」
「待って、その顔可愛すぎる」